

【今日の説教から】

ピリピ書も読み終わり、イエス様のご降誕を待ち望みつつ今日はヨハネ福音書の冒頭の言葉を味わいたく願います。

「初めに言があった」この言葉は、やはり創世記の冒頭の言葉を想起させるものです。

「はじめに神は天と地とを創造された」

それもそのはず、ヨハネはこの福音書の最後の方でこう語っています。

「しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである」

イエスという者は異端だ、自らを神と等しくして神を冒瀆する者だと祭司や学者から非難を受けたイエス様でしたが、その実相は何であるのか、それがこの書の執筆目的です。

主イエス様は万物の創造の前から、初めから神と共におられた方であり、永遠に存在し続けるお方です。

このイエス様は父なる神と共に万物を創造されたお方です。

この方の内に命があり、これこそが人の光です。世は良き所に作られたのに、人の世は暗闇と死に覆われてしまいました。しかしこのイエス様のうちには光と命があります。

暗闇に光を、死と滅びの結末に贖いの赦しと命を与えるために来られたイエス様を受け入れるのかどうか。

「しかし、彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。」これがクリスマスのメッセージです。神様からの贈り物です。

皆様おはようございます。

いよいよ11月も後半に入りました。今年もあと1か月半を切りました。時の経つのは早いですが、私たちはイエス様のお生まれになられましたことに感謝して、光と愛と恵みにあふれるクリスマスを過ごして今年も一年を締めくくり、新たな年への展望を得ることが出来ますから感謝いたします。

ピリピ書も読み終わり、イエス様のご降誕を待ち望みつつ今日はヨハネ福音書の冒頭の言葉を味わいたく願います。

1:1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。

1:2 この言は初めに神と共にあった。

「初めに言があった」この言葉は、やはり創世記の冒頭の言葉を想起させるものです。

「はじめに神は天と地とを創造された」

それもそのはず、ヨハネはこの福音書の最後の方でこう語っています。

「しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じ

るためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである」
イエスという者は異端だ、自らを神と等しくして神を冒瀆する者だと祭司や学者から非難を受けたイエス様でしたが、その実相は何であるのか、それがこの書の執筆目的です。
主イエス様は万物の創造の前から、初めから神と共におられた方であり、永遠に存在し続けるお方です。

「言があった」と書かれるこの象徴的な書き方ですが、「初めに御子イエスがあった」と言っても良かったのだと思いますが、やはりこれは反対者の言葉尻を捕らえることを阻止するためだったのでしょうか。神を冒瀆する者をまた所の冒頭から堂々と神と等しくしている忌まわしき所とのそしりを受け、読む者の手に渡らなくなることを避けるためだったのでしょうか。いずれにせよ、私たちが読むのならばこれは人としてお生まれになった神の御子、初めから神様と共におられた私たちの主イエス様であることは明白なのです。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。」と1-2節にありますが、ここには「あった」という語が4回繰り返されています。この言葉は、過去においてずっと存在し続けていたという意味です。ずっと、ずっと、ずっと果てしなく長い間存在し続けておられたという言葉が、それも4回も繰り返されています。人はそのようなお方であるイエス様を知らないと拒絶したのですね。

1:3 すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。

このイエス様は父なる神と共に万物を創造されたお方です。すべてのものを、例外なくすべてのものをおつくりになられた方。このお方は無から有を作り出されるお方。そういうイエス様が2000年前、人となられて、私たち人類の間に住まわれたのですね。

1:4 この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。

ここに命があります。ここに人の光があります。
どうして命とか、光とか、これらのことが改めて語られる必要があるのでしょうか。

1:5 光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった。

それは、闇があるからです。闇がはびこっているからです。そして命が損なわれているから

です。命から隔たり、命から漏れ、死と滅びとが広がっているからです。
それではなぜ人に闇と死とが広がっているのでしょうか。それは人に罪があるからです。

ローマ 6:23 罪の支払う報酬は死である。しかし神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスにおける永遠のいのちである。

7:18 わたしの内に、すなわち、わたしの肉の内には、善なるものが宿っていないことを、わたしは知っている。なぜなら、善をしようとする意志は、自分にあるが、それをする力がないからである。

7:19 すなわち、わたしの欲している善はしないで、欲していない悪は、これを行っている。

7:20 もし、欲しないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの内に宿っている罪である。

7:21 そこで、善をしようと欲しているわたしに、悪がはいり込んでいるという法則があるのを見る。

7:22 すなわち、わたしは、内なる人としては神の律法を喜んでいるが、

7:23 わたしの肢体には別の律法があって、わたしの心の法則に対して戦いをいどみ、そして、肢体に存在する罪の法則の中に、わたしをとりこにしているのを見る。

7:24 わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか。

7:25 わたしたちの主イエス・キリストによって、神は感謝すべきかな。このようにして、わたし自身は、心では神の律法に仕えているが、肉では罪の律法に仕えているのである。

私たちは弱さの中にあります。神の御心を思わず、罪にひかれ、常に的外れなことを思い、失敗を犯します。懺悔と悔い改めの連続です。しかし私たちが懺悔して赦されるのはイエス様が代価を支払ってくださったからです。私たちが仮に何かを壊してしまったら、どんなに誤っても、その損害を弁償しなければたいていは許されないのと同じように、イエス様は罪を犯した私たちのための弁償となってくださいました。

マタイ 20:25 そこで、イエスは彼らと呼ばい寄せて言われた、「あなたがたの知っているとおり、異邦人の支配者たちはその民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。

20:26 あなたがたの間ではそうであってはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、

20:27 あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、僕とならねばならない。

20:28 それは、人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多

くの人のあがないとして、自分の命を与えるためであるのと、ちょうど同じである」。

1:4 この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。

1:5 光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった。

罪により命を失ってしまった私たちには命が必要なのです。道を踏み外して神様のもとから離れ、暗闇の中をさまよっていた私たちには光が必要だったのです。イエス様はそれらを私たちに与えてくださったのです。

1:6 ここにひとりの人があって、神からつかわれていた。その名をヨハネと言った。

1:7 この人はあかしのためにきた。光についてあかしをし、彼によってすべての人が信じるためである。

1:8 彼は光ではなく、ただ、光についてあかしをするためにきたのである。

洗礼者ヨハネのことが記してあります。

「光についてあかしを」するという言葉が、そっくり2回繰り返されています。彼は光そのものではありませんでしたが、世の光としてのイエス様を伝える者として遣わされました。

2 コリント 3:16 しかし主に向く時には、そのおおいを取り除かれる。

3:17 主は霊である。そして、主の霊のあるところには、自由がある。

3:18 わたしたちはみな、顔のおおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるのである。

(新改訳聖書)3:18 私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

灯台のように、暗闇に光る光はどんなにか大きな助けになるのでしょうか。私たちは主の栄光を反映させることができます。

2 コリント 2:15 私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神の前にかぐわしいキリストのかおりなのです。

2:16 ある人たちにとっては、死から出て死に至らせるかおりであり、ある人たちにとっては、いのちから出ていのちに至らせるかおりです。このような務めにふさわしい者は、いたいだれでしょう。

2:17 私たちは、多くの人のように、神のことばに混ぜ物をして売るようなことはせず、真心から、また神によって、神の御前でキリストにあって語るのです。

また私たちはキリストを証しするかぐわしいキリストの香りです。その香りを芳しいと思い受け入れる人にとってそれは救いになりますが、その香りを良く思わない人もいと聖書は語ります。しかしいずれにしても私たちはキリストを伝えるキリストの香りなのです。

1:9 すべての人を照すまことの光があつて、世にきた。

1:10 彼は世にいた。そして、世は彼によってできたのであるが、世は彼を知らずにいた。

1:11 彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった。

1:12 しかし、彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。

1:13 それらの人は、血すじによらず、肉の欲によらず、また、人の欲にもよらず、ただ神によって生れたのである。

命と光が暗闇の中にあり、暗闇はこれに打ち勝つことはできません。この光は人のいのち、この贖いのイエス様こそ、私たちの救いと希望です。その贖いによる救いに感謝し、このお方を受け入れる者には神の子となる力、権利、権威、特権、資格が与えられるのです。それは人の願いでも血筋によるものでもありません。立場の優劣とか、功績の有無とか、どれだけ教会に寄付したとか、そういうものとは一切無縁です。この救い、それはただ神様のお恵みによる一方的な救い、見返りを求めない恵みの御業です。

1:14 そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であつて、めぐみとまこととに満ちていた。

イエス様は、父なる神様の、罪と暗闇と死との中にさまよっている人類への、そういう熱い思いを身に受けてこの地上にお生まれになりました。父なる神様と全く一つ心で、イエス様は神の一人子として栄光を帯びて、恵みとまことに満ちてお生まれになりました。その場所は暗く寒く汚い馬小屋でしたが、それこそが私たちの寒々しい、愛に冷え冷えとした自己中心の心の中に住むとの意思表示であつたに違いありません。そのようなところでお生まれになり、そしてどくろの丘の十字架の上で亡くなられたイエス様。しかしこのお方に恵みとまことと神様のご栄光がひしめいているのです。

1:14 そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であつて、めぐみとまこととに満ちていた。

1:12 しかし、彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。

◇祈祷；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。遥か永遠の昔から、永遠の先まで、ずっとおられ、これからも存在し続けるお方、神様、そのあなた様が私たち一人一人のことをご存じでいらっしゃる、愛と恵みに満ちた方でおられ、闇と死の世界に光と命を、御子イエスキリストの贖いから来る救いによってもたらしてくださいまして、本当にありがとうございます。どうかこの恵みを、イエス様にある神様のご真実を多くの方々が理解され、お受入れになられますように、どうぞお導きください。どうぞあらゆる苦しめる方々を神様の救いと平安の中にお導き下さい。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。私たちをお用い下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン